

縄文の都

— 藤内遺跡 —

ここは、信濃境駅から北寄りの烏帽子と高森の境に位置する、なだらかな南西向き斜面の開拓地です。現在は一面のキャベツ畑になっていますが、遙か四千〜五千年の昔、縄文の都として栄えた藤内遺跡が発掘されたところです。

眼前には、甲斐駒ヶ岳や鳳凰三山など南アルプスの山々が広がります。南東には富士山を望むことができます。海拔九五〇メートルの高原の地で、縄文の人々もこの美しい山々を眺めながら、何を思いどのような暮らしをしていたのでしょうか……。

当時このあたりは、現在よりやや暖かな気候だったようです。人々は雑穀を栽培し、鹿や猪、兎などを獲って生活していました。

住居は7本の柱を使った直径5メートルほどの卵形の竪穴式で、中央には石で囲った炉が設置され、その周りには板敷きの寝床や祭壇が配されています。屋根材には木の枝や茅が使われていました。

ひとつの家族が2〜3軒の家に分かれて住み、全部で4〜5家族、12〜15軒程度の住居が円形に並んでいました。

人々の農耕と狩猟の生活を支えたものは石器（石の道具）でした。石鍬で畑を耕し畝を立て、靴形鍬で雑草を取りました。また収穫に



現在の草取鎌との比較（右側は手鍬）

藤内遺跡

信濃境駅あたりを中心とするおよそ2キロ平方メートル四方の範囲には、4千〜5千年前（縄文時代中期）の遺跡が稠密に分布しており、井戸尻遺跡群と呼ばれている。この地で新石器文化が開き、繁栄をきわめた時代である。中でも最盛期は中期中葉の藤内期であり、この土器の広がりや井戸尻文化の広がりをとらえる指標となっている。

藤内遺跡は4千7百〜4千5百年前の集落で、戦後開拓地として開墾されるなかで多くの遺物が発見された。昭和28〜29年、宮坂英弉氏により最初の発掘が